

茶のある暮らし

# なごみ

2020

5

昭和55年5月20日第三種郵便物承認  
令和2年5月1日発行  
《毎月1回1日発行》通巻485号

特集

## 南蛮の茶道具

茶人が見つけたアジアの工芸



和

小特集 みぞぐちすいとう 溝口翠濤の数寄

文=井上理津子 ライター

1955年、奈良市生まれ。タウン誌記者を経てフリーに。著書に「さいごの色街 飛田」「葬送の仕事師たち」「いまどきの納骨堂」など。

“職人の生き方も、  
後進に伝えていきたい”

師——田中昭義さん

## 師弟百景 ⑤ 左官

“この仕事に入ったから  
には中途半端はダメ”

弟子——吉永真美さん



## 伝統工法の現場で

この日の現場は、京都市北区の閑静な住宅地にあった。昭和初期に建てられ、華道のお稽古場としても使われてきた民家が改修中だ。敷地内に建つ別棟と行き来できる約十メートルの通路で、若い女性がひたむきに壁を塗っていた。

あと少しで春が兆し始める時季になるとは到底思えない曇天。冷え込む中、女性は薄手のウインド・ブレイカー姿だ。心なしか、額に汗が滲んでいるように見える。左手に持ったパレットから粘土をコテに取り、壁に薄く塗り重ねていく姿があった。ほんの少し薄緑かつ薄黄の色味を帯びた土壁が、彼女——吉永真美さん（十九歳）の気迫をどんと受け止めている。私の目には、そう映った。

「元は漆喰で、経年劣化して黒ずんでいました。今回、施主が自然素材の色土への塗り替えを希望されたんですね。色土には、含まれている鉄分の性質や腐植によって、褐色、赤、青、黒っぽいもの、白っぽいものなどさまざまある中、これは『浅黄大津』です」

親方の田中昭義さん（四十六歳）がそう説明してくれた。「浅黄」は、薄い黄色および

薄い青緑色の土のこと。「大津」は、滋賀県大津に端を発する、土に石灰と麻スサを混ぜた材料を塗りつけ、コテで何度も押さええて緻密な肌に仕上げる技法のことだそう。元の漆喰の壁をはがしてから復旧し、その上に塗っていく。大きく分けて、下塗り、中塗り、上塗りの三段階があるうち、今日は中塗りの工程だという。

「彼女は心からこの仕事をやりたくてうちに来た子。まだ一年目ですが、本当に一所懸命なんですよ」と目を細め、そして自身もコテを持った。

「ここをこういうふうだね」

田中さんは柱の真横にコテを当て、上から下へと一直線に動かす。一ミリだにブレない。

思わず、「息を止めて作業されましたか」と聞いた私に、「いやいや、息はしていますよ」と笑顔を向け、「コテの痕跡をまっすぐ通らせる」と、なんとなく風合いが違ってくる。我々の一つのプライドです」と続ける。その後、壁の角の部分にコテを当て、念入りに押さええた。

吉永さんは、それらの技を食い入るように見る。

「しっかり押さええることによって、はがれにくくなる」

という言葉が発せられたときも、聞き漏らさないぞという表情だった。「あとで一息つく時間にメモをするんです」と、ポケットから小さなノートを取り出して後に見せてくれたが、そこにはきれいな小さな文字で、現場で教わったそうした事柄が数多書き込まれていた。



丁寧に仕事を伝える田中さん。言葉遣いは柔らかい。左官の伝統を維持するため、個人契約が多かった慣例から脱し、弟子を雇い、事務所を株式会社化したという。

## “コテの痕跡をまっすぐ通らせる。我々のプライドです”（田中）

### 職人氣質にしびれて

田中さんは独立して十五年になる、京都の左官である。神社仏閣、城から文化施設、町家、茶室、ゲストハウス、別荘、商業施設まで広く手がける。

吉永さんが作業している通路が、表玄関に脇からつながっている。そこはもう仕上がっているとのこと、木戸を開けてもらい、私は思わず「わっ」と感嘆の声を上げてしまった。茶色ともグレーともつかない温かい色の聚楽壁と、わずかに茶色が勝った三和土。田中さんの設えによる、凛とした小宇宙だった。「歴史と風土に育まれた『京コテ壁』を、時代にそぐう形で継承させたいんです。昔ながらの材料と道具、技法にこだわっています」とさりりと言う田中さんのこれまでの道をまっすぐ知りたい――。

父も左官だった。「一人親方」として働く父を見て育ち、自分の将来の姿を重ねたが、

大学卒業時に「あんたはやらんでいい」と突っぱねられた。折しもバブル崩壊の後。緻密な技法を求められる依頼が激減し、左官業界が右肩下がりだったための苦言で、「どうしてもというなら、あんたの判断でご勝手に」と譲歩された。こうして、京都市内の他の左官店に修業に入る。

「当初、左官の仕事自体にさしたるこだわりはなかったのに、修業した店のすごい技術と、職人の気概に引き込まれたんです」

主に数寄屋や伝統文化財の建物の土壁を請け負い、七、八人の凄腕の先輩がいる店だったのが幸いした。当初指示されたのは道具置き場の掃除。続いて「スサ通し」。スサとは、ひび割れを防ぐために壁土に混ぜる、藁や麻を細かく切ったもので、これを篩ふるいにかけ、混入している虫を取り除くことだった。来る日も来る日も、日がな一日おこなって、見つかる虫は五匹ほど。さらに、ヒゲコ（補強のために壁の内側に入れる晒あびし麻の束）作り。嫌気が

さすがに十分だったが、ある日、先輩を送って行ったときに見た俵屋旅館の壁が「涙が出るほどきれいかった」のだという。

三年目によくやくコテを持たせてもらい、「重い」と感じた。物理的な重量に、いよいよ本格化する自身の職人道に向ける思いが乗った重さだ。壁に合う土を探し、細かくふるい、状態や長さにこだわったスサを混ぜ、水と捏ねねて発酵させる。石灰などをバランス良い比率でブレンドする。こうした材料ごしらえから始まり、昔ながらの硬いコテを使い、いくつもの塗り工程を重ねる。ひと手間もふた手間も多くかける「古くさい伝統技法」こそ、強くて美しい壁づくりの要かぎだ――。日に日に学びを深めるとともに、年配の先輩の職人氣質を目の当たりにした。

「地方出張中の夜、寡黙な先輩が『兄貴が危篤になった』とおっしゃり、僕は『すぐに駅まで送ります』と言いましたが、首を横に振られた。『いや。明日、塗ってから帰る』と」



壁の四周「チリ廻り」を押さえる。現場での実践は初めてだが、週に2回通う京都市内の左官学校で技術を高めている。

「目が悪くなり、上塗りの細かい仕事をしづらくなった高齢の先輩は、親方に『手間(給料)値段を下げてください』と頼み、その仕事を遂行した後、コテを置かれた」

独立後、田中さんを手伝ってくれていた父がガンになった。余命宣告された日、何事もなかったかのように黙々と仕事をした。最後の入院となる前日、自分の仕事場を隅々まで

掃除し、道具を磨き上げたとも。「職人の責任感とプライドが滲むこうした先人の生き方も、後進たちに伝えていきたいんです」

### 女子高生から左官職人へ

今、田中さんには四人の弟子がいる。吉永さんは最も新入りで、最も若い。唯一の女性だ。

——なぜ、左官の道へ？

「愛知県の出身なのですが、中学のとき、学校の改装工事があり、ずいぶん汚かったトイレが、利用するのが楽しみなほどきれいになったんです。改修って人の心も変えるんだなと思います、内装に興味を持ったのが入り口です。高校で『進路を考えよう』という授業があったので、内装の仕事について調べて左官のことを知り、『あ、私のやりたいのはこれだ』とすぐに思いました」

ネット検索し、数々の左官の会社のサイトを見て、いちばん「グッときた」のが田中昭義左官のサイト。「伝統を引き継ぎ、伝える」のニュアンスが「押し付け」でなく、柔軟だと感

じたという。初めて訪ねたのは、高校三年の夏。倉庫に土やセメント、脚立などが置かれていた光景を胸に刻んだが、「緊張しすぎて、何も質問できなかつたことしか覚えてないです」。ビルの補修とモデルハウス。二カ所の現場へ連れていってもらい、そこでも緊張しっぱなしだった。しかし、「弟子入りさせてください」となったのである。

高校の卒業式を終えるや否や自動車学校に通い、通勤等に必要となるバイクの免許を取得。一人暮らしのマンションを借り、友人知人の一人もいない京都へ越してきたと聞き、私はつい「親御さんは心配されたでしょうね」と。「父は、一カ月で音を上げて戻って来ると思っていたそうです(笑)。私は逆に、マンションを借りるとき親に援助してもらったから、中途半端はダメという気持ち大きかったです」

えらい、と口をついて出る。

七時までに出社。掃除や土ふろい、スサ通し、荷物運びなど入門早々に与えられた仕事は、田中さんの四半世紀前の修業開始時と同じだが、「来る日も来る日も」ではない。二週

「やめたいと思っただけではない。反省ばかりしていています」（吉永）

目には材料づくりも教えられ、コテをプレゼントされた。田中さんは、弟子のモチベーションを上げて育てる仕組みを構築してきていたのだ。寸暇を惜しんで、「社内に設置された板に塗って練習する」日々。三週目には、先輩について現場に行かせてもらえた。

「最初の現場はお寺の壁の補修で、古い壁をヘラでそげ落す作業をやらせてもらいました。バケツをどこに置いたら先輩が仕事をしやすいかと考えながら掃除したり、養生をしたり」

徐々に、先輩から「あれ、やって」「これ、やって」の指示が増えていく。「コテは立てて持つといい」「コテではなく、材料が動く感覚で」などと教えてもらうことも多々。「吉永さんには、みんな特に親切に教えてあげたがるんですよ。彼女が入ってから、社内の雰囲気が変わった」と、田中さんが言う。いよいよ壁塗りを許されるようになったのが年末で、この日が、現場でコテを使う二度目の日だという。

「夕方、全員が各現場から会社に戻ってきた後、進捗状況を共有するために『終わりの会』を毎日やっています。一人一言ずつ、その日の自分の作業について言ってもらうんですが、吉永さんの発言はズバリ的確です」



田中さんのコテ(右)と吉永さんのコテ。  
それぞれ自分の焼印を作って擦す。

と田中さんが言うのと、「親方、そんなく。とんでもないですっ」と、十九歳の女の子らしい口調になった。

——最近、「終わりの会」でどんなことを言いましたか？

「茶室の腰掛待合の養生のとき、先輩との連携がうまくいかずに迷惑をかけました」とか「タイルを貼る際に、目地の部分が難しく、うまくいきませんでした」とか……」

——やめたくなったことはないですか？

「一度もないです。反省ばかりしています。一番の大失敗は、去年の夏、熱中症になったことです。炎天下で我慢していたら、手足が冷たくなって震えがきました。先輩がクーラーのついた車のシートに寝かせてくれて、助かったんですが、迷惑をかけました。あのとき、我慢せずに早く『しんどい』と言っていれば、軽症で済んだだろうに、私のミスです」

頭が下がるではないか。田中さんから「職人の責任感とプライドも弟子に伝えたい」と聞いたが、吉永さんは一年目にしてもう万事受け止めているのか。

熱い志を温かく示す親方の下で、腕も感受性も磨かれる。彼女が将来、仕上げまで手がける「京コテ壁」をぜひとも見たい、と思った。



たなか あきよし | 1978年、京都市生まれ。大学卒業後、「佐藤左官工業所」で10年間修業し、独立。2015年に法人化。代表作に、大阪府堺市「さかい利品の杜」内の国宝茶室「待庵」の再現。

よしなが まみ | 2000年、愛知県生まれ。2019年3月に高校を卒業し、4月から田中昭義左官株式会社の一員に。週に2日、京都府左官技能専修学院にも通っている。

●師弟二問二答

——至近の休日は？

田中「現場を見に行ったり、

塗りのサンプル作りもした」

吉永「左官道具を買いに行ったり」

——高校時代の部活は？

田中「ラグビー部」

吉永「美術部」

——よく見るテレビ番組は？

田中「すみません、

全然見ません……」

吉永「職人らが登場する

バラエティ番組『和風総本

家』と、

改築のドキュメンタリー番組

『大改造!! 劇的ビフォーアフター』」